

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が2例(共に、10歳代の男性)あり、血清型・毒素型はO157(VT1V T2)及びO157(VT2)です。推定感染経路は、接触感染及び経口感染です。本年の累積報告数は25例になっています。
- バンコマイシン耐性腸球菌感染症の報告が1例(60歳代, 男性)あります。症状は胆管炎で、胆汁から分離された菌から、バンコマイシン耐性遺伝子(VANC)が検出されています。推定感染経路は不明です。本年の累積報告数は3例になっています。
- 水痘の定点当たり報告数は1.02(42例)で、前週(0.83, 34例)に比べ増加しています。年齢群別では、1歳が12例(28.6%)と最も多く、5歳以下が83.3%を占めています。例年、年末に向かって報告数が増加しますので、今後の動向にご注意ください。
- RSウイルス感染症の定点当たり報告数は、0.59(24例)で、前週(0.80, 33例)に比べ減少していますが、依然として過去5年平均値を大きく上回っています。引き続き今後の動向にご注意ください。
- インフルエンザの定点当たり報告数は0.01(1例)で、今シーズン(第36週以降)は、0.00～0.01(0～1例)で推移しています。一方、全国の定点当たり報告数は0.22で、第43週以降、5週連続で増加しています。今後の動向にご注意ください。

◆ 今週のトピックス: < 感染性胃腸炎 >

感染性胃腸炎の定点当たり報告数は15.90(652例)で、7週連続で増加するとともに過去5年平均値の冬期のピークを大きく上回っています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 三類: 腸管出血性大腸菌感染症 2例【1月以降の累積報告数 25例】
- 五類: バンコマイシン耐性腸球菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 3例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	15.90	652
	② 水痘	1.02	42
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.98	40
	④ RSウイルス感染症	0.59	24
	⑤ 突発性発しん	0.37	15
眼科	流行性角結膜炎	0.20	2

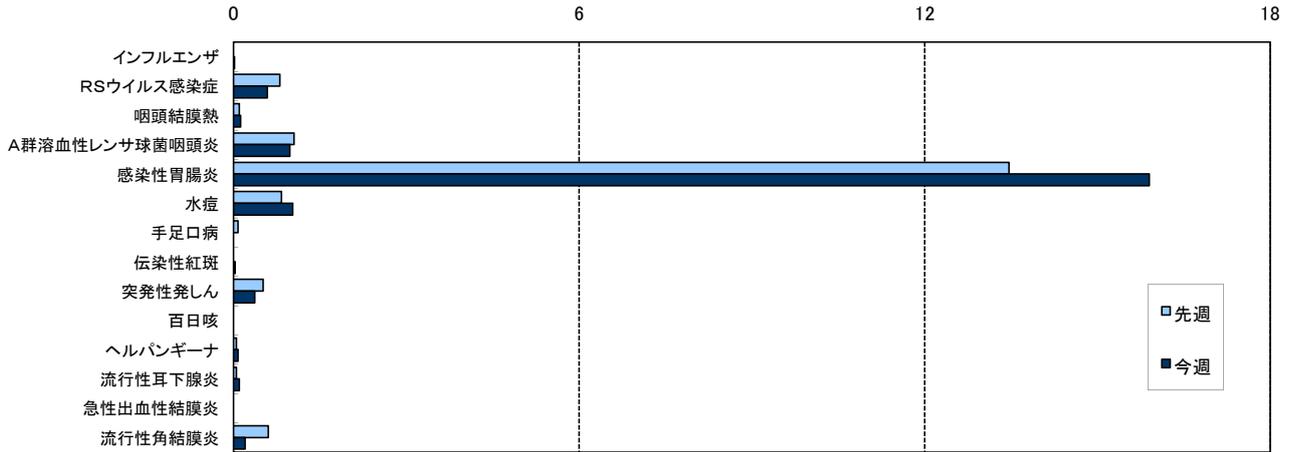
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: < 感染性胃腸炎 >

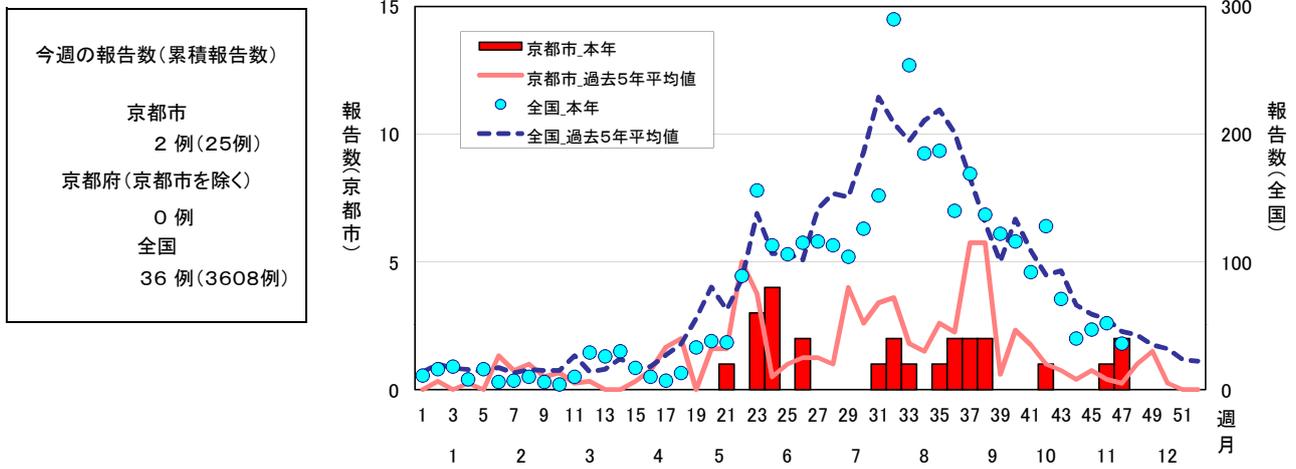
(注) 京都市のデータは、平成24年11月29日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第47週)と先週(第46週)の定点当たり報告数の比較

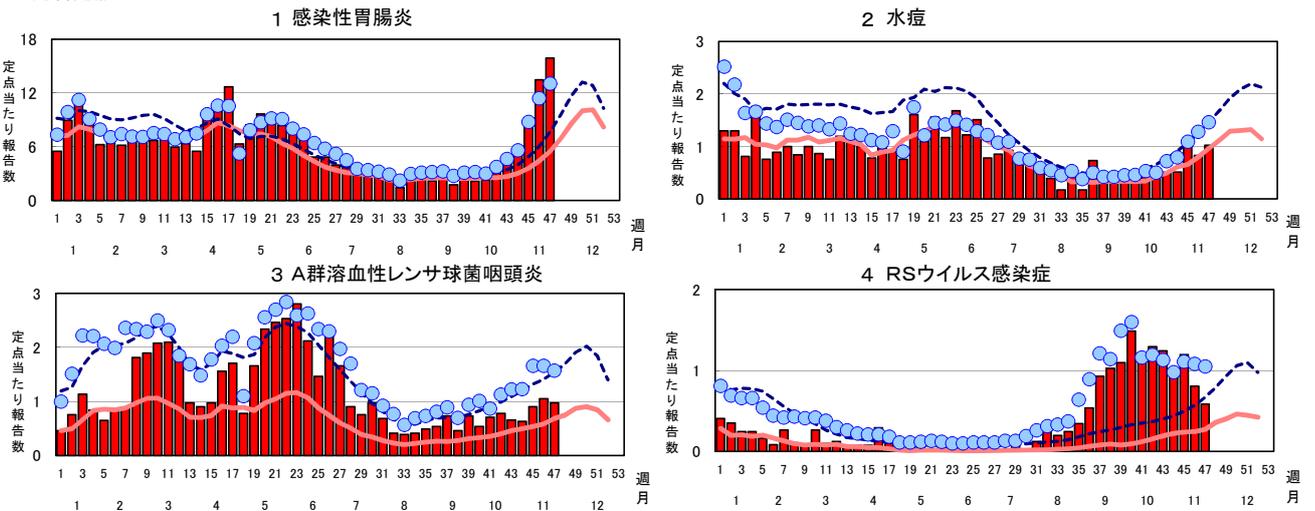


2 腸管出血性大腸菌感染症の推移

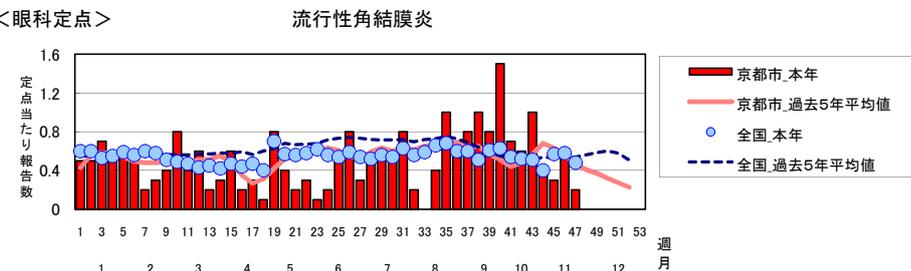


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



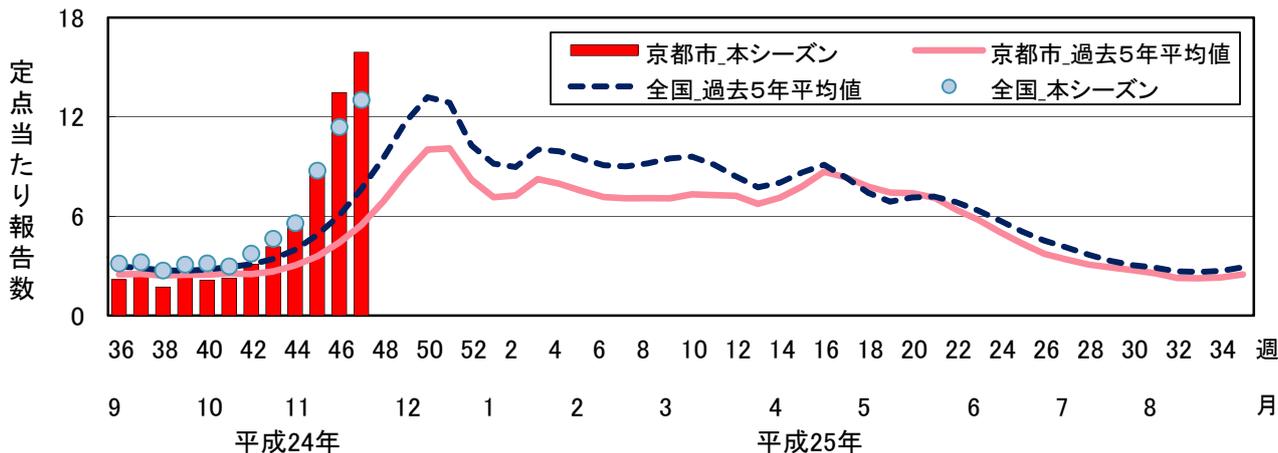
第47週(11月19日～11月25日)トピックス: <感染性胃腸炎>

感染性胃腸炎の定点当たり報告数は15.90(652例)で、7週連続で増加するとともに過去5年平均値の冬期のピークを大きく上回っています。

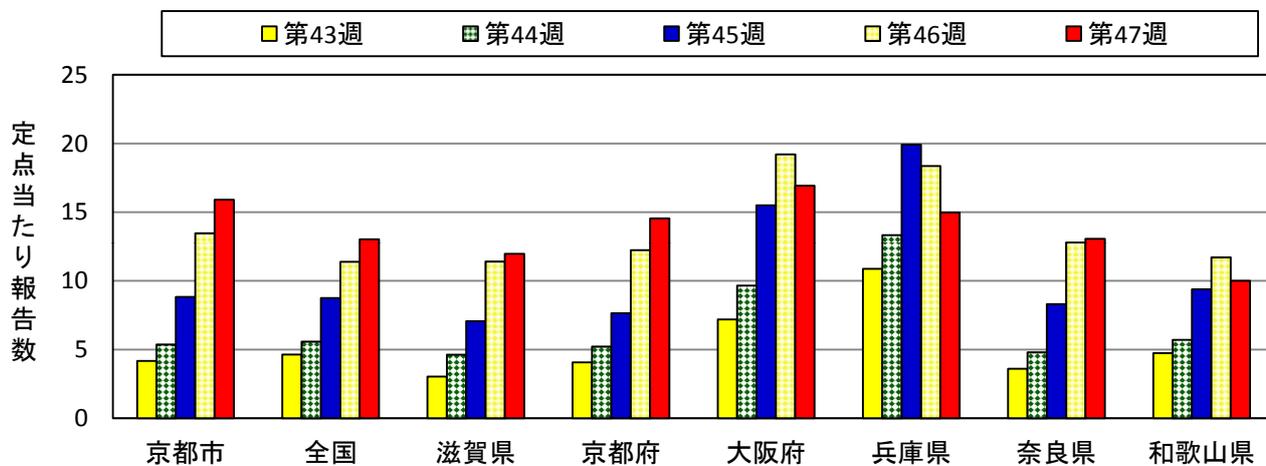
近畿6府県の定点当たり報告数の推移をみると、3府県で前週に比べ減少しており、その他の3府県においても増加率に鈍化がみられます。

京都市衛生環境研究所に搬入された集団発生の検体から、10月にノロウイルスG I (1事例)、G II (1事例)、11月にノロウイルスG II (1事例)を検出しています。また、病原体定点において11月に採取された感染性胃腸炎の検体から、ノロウイルスG IIを15件検出しています。全国では、ノロウイルスG IIの検出報告が多くなっています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



近畿6府県の定点当たり報告数の推移



全国の今シーズンのノロウイルス検出報告状況(平成24年11月30日現在)

